

Title	音楽のリパーカッションを求めて：アルチュール・オネゲル《交響曲第3番 典礼風》創作
Author(s)	生島, 美紀子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44777">https://hdl.handle.net/11094/44777</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	生島美紀子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18320号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	音楽のリパーカッションを求めて—アルチュール・オネゲル《交響曲第3番 典礼風》創作—
論文審査委員	(主査) 教授 上倉 庸敬 (副査) 教授 大橋 良介 教授 藤田 治彦 教授 根岸 一美

#### 論文内容の要旨

本論文の目的は、20世紀前半に活動したスイス人の作曲家アルチュール・オネゲル (Arthur Honegger, 1892～1955) の交響曲、とくに《交響曲第3番 典礼風》で示された独自の音楽語法を分析し、その音楽が音楽史上にもつ意義を解明することにある。

本文は3部構成。第Ⅰ部は序章から第3章まで、第Ⅱ部は第4章と第5章、第Ⅲ部は第6章と終章から成る。さらに、付録1「オネゲル『近代音楽』についての講演」全訳、付録2「オネゲル《交響曲第3番 典礼風》プログラム・ノート」全訳、付録3「オネゲル年表」と、第Ⅲ部の楽曲分析に関する「補遺」、「参考文献一覧」および「楽譜例」を付す。

体裁はA4判。1ページが1行40文字で36行、本文は118ページ(400字詰原稿用紙に換算しておよそ400枚)、付録以下をあわせれば全体は179ページである。

『第Ⅰ部 当時の音楽語法をめぐって：オネゲルの旋律志向』は、文献資料をもとにオネゲル独自の音楽思想を明らかにする。「第1章 不協和音の概念」によれば、シェーンベルクにおける十二音技法の難点は、オネゲルにおいて従来の和声法をとり入れることで克服されたという。「第2章 対位法の概念」は、その独特な不協和音の概念が創作にあたってどのように用いられたかを解き、オネゲルの音楽が本質的に旋律を志向している点を浮かびあがらせる。そうした創作態度は、聴取のさいの知覚をオネゲルが優れて重視していたからにはほかならないと、これが「第3章 旋律志向の原点から作曲家としての基本姿勢へ」の主張である。

『第Ⅱ部 独自の音楽技法の追求：旋律志向と交響的構築』は、文献と楽譜をもとにオネゲルの模索した旋律研究を明らかにする。「第4章 伝統に根ざした20世紀の旋律」によれば、オネゲルは旋律性を最大限に生かしながら、秩序と均衡をそなえた交響的な構造物を音楽空間に構築したという。「第5章 交響的構築の問題と克服」は、オネゲルが音楽上の厳密な構造を追求しつつも、聴取の知覚にも配慮した豊かな音楽表現を目指していたことを浮かびあがらせる。

『第Ⅲ部 交響曲の創作：楽曲分析的アプローチ』は、精緻な楽曲分析にもとづき、オネゲルの独自かつ最高の達成が《交響曲第3番 典礼風》であることを主張する。「第6章 小品から創作力の頂点へ」は、1919年の《牝山羊の踊り》から10年後の《交響曲第1番》をへて、さらに15年後の《第3番 典礼風》へと、オネゲルにおける音

楽語法の確立を詳細に追尋する。「終章 音楽のリパーカッションを求めて」によれば、創作の集大成であり「オラトリオ作家による交響曲」ともよぶべきこの作品は、音楽史的に技法上なお有効であり、精神的には、20世紀前半におけるヨーロッパの具体的な生とわたりあって美と肯定を主張するところに、未来に拓けた意義を見いだすことができる。

#### 論文審査の結果の要旨

アルチュール・オネゲルの評価は、主たる活動の舞台であったパリで没したときが、その絶頂にあったといつてよい。現在では管弦楽作品《パシフィック 231》(1923年)のみによって知られる作曲家であり、時代の重なるシェーンベルクが、十二音技法によって20世紀後半の音楽への扉をひらいたと見なされるのに対し、その蔭に隠れて、単なる「伝統主義者」と評されることが多い。そうした通念を真っ向から否定したところが、本論文の眼目である。読みやすく坦々とした筆致であるが、狙いには激しいものが含まれている。

本論文は、つぎの3点を証明して、従来のオネゲル観を打破しようともくろむ。1) オネゲルにとって交響曲の創作が「最も厳粛な」仕事であったこと。2) 十二音技法も視野におさめつつ、聴取のさいの知覚に着目して、オネゲルの音楽語法はシェーンベルクの射程をはるかに凌駕していること。3) 伝統を破れなかったように見えるところにこそ、人間と音楽に関するオネゲルの思想の独自性があること。もくろみは十分に達成されたといえよう。

参考文献一覧からも分かるように、論者はひろく文献を渉猟して、その逐一を丁寧に読み解いている。とりあげた楽曲の分析は手堅く綿密で、説得力に富んでいる。文献の読解と楽曲の分析がひとつに縋り交ぜられて、作品に対するオネゲルの一貫した態度、方法が明らかになる。それは、これまで考えられてきたオネゲルの作品、オネゲルの音楽観とは明白に一線を画している。その手続きは着実で、抑制が利いており、信頼するに足る。

音楽史、精神史のうちにオネゲルを位置づける作業は、まま議論に飛躍が見られ、いまだ一考の余地なしとしない。しかし、それとても将来の研究に期待することができる。

博士(文学)の学位を授与するにふさわしい論文であると認定する。